12二

上海出張記

1185

相撲之私記

成島峰雄

寛政三年六月十一日吹上にて相撲御覧の事有り
抑相撲はいにしへよりありしかども近き比は絶て久しく見ん
侍る事まれなりしかるを今年のはじめより
御目見ゑ程かさに新庄といふ抱久しき武蔵井の庄
てりおこして近しおもとにまかせ紫甘川行はせ
保存は中絶保ちよろこびおこされしか其濃文
殊に中ゞへたけくいさみたる其呼ぶ事にて
あまたる諸侯の家の中にて身を立有る
世としる紀いかに紀行しれたる力など武藏
ことに事を挙とせしより宮所家の財宝して御覧のこと

門 ヲ多9 雑 1184 巻

あつしと知て志りあまりて甲子待を持ちまりてこ
とより後なりしふとも吟く公藝尖りほのかさしもと
緞しより今兎ら染のむしらを張なとヽ云指
さへいてきたりて以以しく乃かとハのりる左處
むし光貴手中山へ蔵今ハ太閤と名残か兵助牛ハ
冥日紀とこなへおもむきゃいと祢せるとあきせて三の役
としをまより前號まの四海く乃下に座に座ス座
ろんちらあんちら前せもしとを示残てちら犢鼻褌
ハまきりとよき米よい乃おきハ行司とつき返扇
のこしきに残笨の梃りしあるはくる皆有りぬる室を
おまとてその名とすりし見えきし海へまりしこるしつげ

たるへし今ら竟くこもりなりく常盤なる松のえ見られし
遠く志かわり君家はひらちをもはるほもおりもて
きえしよ残ハ紅て紫中し紀ぬるて色みな残た
名れなんの種しても川しみそへ柜おらなこたりし京ハ
花田のまんを尼君にこし絶てらしたり去振乃中央
なりし花の八りそかきて西七つ升酒瓶子ふそは
かしかや伊し栗本のこあん娘なそへ杏くこるさ
残し紀むの川くの設なあとりし後のむし取足枝
出せり御三卿れなるし執柄乃人しよりて弟の
関布衣以下はまも御前中りらるかさりハこ嵩様要
あり御ひらさて知しさらふ、ふ守てハ出き為紀ゑこし達

いさゝかも油断なく三つまでの村迄る所を見あらはし御らんぜ
給ふ処に合の更衣林たる者はしけるにて白旗立てゝ
男二人出て大きなる桶の内よりいでゝやすみて
程なく東の端にて追風と名のる吉田主馬
團扇をさし行司を村屋にて御吉田豊前が小二人を
めしよせて場のうち残らず見とゞけて鳶岩
志賀清兵衛追風は縁の内へ入り延よく行きて
むかふより見おろし行会し方屋へ入りと
まはりて四方へ飛ぶ二人の行司まきば方屋
昔より左右へ進みて瓶子を持ちて神酒を備へ
柱の根に至りて退くこそ行司八代の法なる

本とし左右より立て四本柱はしらのもとにかざし
つくりたて二寸よりも一尺の行司追風が請く
まはりてそこの縄を四方屋開くいふ事をさへ
かの陰陽をあらはし閏の土俵にし
むかし古法開けれども行司の陰陽をかたどり
其時は陽ふして上下の方をあらはし
ありにこまかなるの法は帝王にあふて是を見
なつく勝負の陰理は両者にとりて志るしにて
かりみるこまかなりの法をおりきよく
いさゝかなりしに行司しら代が法にて志るし
志南乃まつりのおさむまゝ八字のまはりを

そもそも、かの三井に、こく勝負を決せんとなまれ、汝
たしかに、方角と名はなるかり、郡思乃宮祭の
京ひとそいふ、乃宮祭清林といふ名乃出所
の流をつき遠き起高岡を流れ内蒙の追風
ゆくいふ名残なり世にまれんの有職しるをし今御
東ふるふ武度御覧の式をとむ屋きをし作り
なるめんかりかきりなきことのなし追風とをう
てうし病茶ふまふ名ふ勝負
は風志ゆ一せん今先とそ嵐をといひて遠ふ
年久しき三郎とをかるを紀乃上下を立て七八人つし
志ふかひ屋をういけるを世のひたをかをるを

とうとを紀乃上下をて東のうをうを行国名紀伊
志ひまういを先をを乃国名ひとを二給を人ふ中
注乃内ふ入ひしとうをまう詳を立ふ力を
御しゆふをを三郎
中を先ふ三郎也ふ入西のかをうを宮を
西を海を志うを三郎ふ内ふ中ふ又給ふて津
を長入をふを海を三郎ふ海浦のをを紀乃をを東
の大関ふ御川をを紀乃上ふ接洞を名をの無を
を三八者ふ中にを先を毎ふ月ふ四をを
拾ふ者ふ乃宮ふ内ふ三人ふ名ふ伝ふ書ふて称ふ法
ふ津坂乃上をにて海ふ長の内ふ入今ををを乃上を紀

しいかめしく見へけることのほどにてちからつよきもの
足手をおさへてもちむつかしけれ共弁慶をふしぎ
みるかきはかりにおそれをなし弁慶よりてうちけれ共
あらしるを弁慶すかりて右衛門おさへて志ばし立
かたり西の大将として名ある者の関東にて人と
かけたく弁慶まいるを二人志て出くに
あしをおさへてふせ給ふ
かこみなどしたる者と流へき樹のなき者
志かり弁慶ほそくしてとんかうおもしろし
そのかにさしみうつしまいらさる讃岐のけるし
いやましていさてのこまる七十六人のお供とたゞちて立

あふる弁慶右ににたゝふまうてにとかん志し
首をて名常云れ行国二人を横の是ら小四日
是のかたに行国一人右衛の内よる四方乗ら出て
き候申し給ひて是より吸足つる総のとに二人ており
まへ行国七人いでゝかしてお供始り寄て
右大より行国進ミ出て東のかた相模へとち西
乃りしゝや右馳出せしおもりによふ二十お供二人相思
うちておもてすゝく氷桶のもとにちりお供のみ蔵
は入名佐向とり左足合されハ行国うちの残声を
かくるてひとりゝ右馳出にてたみ相模の下の
具て巳しり残つかみなかへ定とし行うちの方より

又かけ身をかくこそのうちへおし移しては桂の有
帯に宮ま嫁ぜを吉雅よりかくしへ宮もち義をし
かちまさひをし乃出して言すかにくひうにしかけて
云ふ年なるくし東の方より尾上松西の方へ郷卿
をめし合せ尾上松郷雅をもてしたなへいでてを
ぬきさうんとせしかへ川中そのうち足立家を越
は私論こし乃波帯として若者の職を
西乃た佐海太の手代をしまたて東の代まて
まうけおくくまてだと佐海守をもちひりさ給ま
よ兄おくりして勝ぬ西の岩ヶ崎まゐ浦々にしてまゐ
木下の手まて来り浦乃早し浅とり纏へ浜乃上まを

義をもり給ひし纏あけまなく諸ヶ浦へ流れまもりして町
こまれもとびる我西の令旅から浜乃あり女と姫こ山丸
さもだれまを浅しにおし出しぬ幾度をまきりて名り
東の千葉両荒目見濤をこれを腰あけ小なき帯あらぬ
極望を西が安宅山に居る小組旦しをとり引ちて
太儀の外へ庭を如しになきおもて東の和田川へ今
出川立合ぬるが今出川踏鐵しの足貢志川東の方
浦の角数か二のうえてとかいつかみたのうちへ云ふ和
たちまを角国むかふこまうんと姫る中のふたを経小
おしなかりしかハ乞をもり出しぬ精と宮と行田村
広ま前立語り東の濤ヽよ角田川をつくさ清河

出きりてかの鳴尾河を西の岸にいたるに至上乃
なしくかこきのここ見しをとり行足を語のここひ
きなくし投をふけてたし乃年とこそ東の出しの
玄川本院の小紀下のなまてゝこき見しなとら経て
寄せ上乃なふく二のうて浅とら君をとまり出らく
こふどうまをはしきて東乃都に小針日野つゝひり
婦みきて負とてかく語らりおしけらま論とおり
しら萬乃つち見またしき浅を泥をかくはなまて
古儀なりあしを論は是東の真林門上経地之院
なかほしゝ離の此なる見しをとて道場其云
儀乃外出しぬこまをすちにしとも四なにならし

出なに入て見合中の示あり菩提山を西乃筆此山を
くこしがう紀そくにてあまりにこり見ひらまて大お
刀あし見くうしさ立負ぬ東の入間郷行男波とこり
下此よ浅ぬき二のうでぬこみ君をとくきなかし
見とく瀬たふせり初瀬沼と西の御門示寫おしまりて
積もまの鳴戸よ若浦をさこなに見み若浦のてく浅
かく見をかけさいのしをまいしおふまも日暮
赤七をちくきまてり雲林よ西の淀渡をあと淀渡
寄合なりねらたやしたまの名をもちて雲林胸
をうきかれいとし古儀の外に律寺山せり東の律
もあ黒雲を此しに互に紀あり思きを隠りしこ自

下のほとりかく記乃二のうでを左右におろし投出を
はるかけしいとの乃継乃川 杜鵑うたふ山の日ぬ
志ゝらにこゝ〳〵京〳〵にこゝ〳〵にこゝ〳〵
をとこ川 〳〵 実さうの世ぬ
の川 濱風と 日本橋濱風
をとこ 〳〵 〳〵 の川 見うけ 手を押りけて
をとこ 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵
といふなり 隅川 赤の 荒波の 荒波
荒〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵
をつき〳〵 頁〳〵 我 星 〳〵 〳〵
をまをほひ 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵

二のうでをかくとにつけ押合をるが如く異の浦
かしまの海の死をかしこ腕をこゝと前〳〵 〳〵
雪をふ山のひかり月 月 月 月 月 月 月 月
結 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵
をつめ守り 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵
けまさ 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵
秀 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵
い先 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵
の浦 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵
先 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵
ふ 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵 〳〵

小膳太の生乃尾河をのぼりて
つゝ〻〻膳ぬ太乃関望川より荒瀬端辺り賀志川
をゝ〻乃義井あり毛生につゝまこと然といろ
思〻大の男も大力なるおのゝ若よあひてゝ五へん
ひとゝの巳一小合りぬ〻ゝ然共月の論ゝ絶しう
いかめしきこゝとゝ世ゝ玉乃井地しゝうく
ゝ日ゝて迷ゝ乃ゝ作ゝ路ゝ
作実ゝ一ぬ投ゝ沼ゝ乃膳となりさて
乃ゝ生ゝ乃いくこゝろんなりゝ乃ゝ日ゝ武身
作ゝ砂行ゝ生ゝ乃ゝ乃ゝ上ゝ乃ゝ赤ゝ乃ゝ緒ゝ山ゝ
巖ゝ作ゝ乃ゝ乃ゝ大ゝ力ゝ乃ゝ鑿ゝ作ゝ乃ゝ乃ゝ探

ゝ乃ゝ乃ゝ生ゝ乃ゝ二ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
赤乃鉄廉山岩ゝ実ゝ西ゝ
赤ゝ乃ゝ赤ゝ乃ゝ
鉄ゝ乃ゝ作ゝ乃ゝ
うはて投ゝ
義信は西の赤ゝ
川ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ

良久しく見合て何れも勝負はなしと見へしか
しに小友千鳥を開座に突の二人たおしにつきおとし
さる行司木村庄之助踏て東の梶乃濱は相撲の勝を上
然に西勝ぬ東は雷電は紀州にして西の錦はよ
負たり鷲ヶ濱をおとに挑はしみて手もなく注を
知へ黒こしら西の宮城野を寄て合しこはしるへしと行司めし
合たるに互に力やかをとしてしきらん志はし捻合しか
津んかり鷲の濱の大関へ寄りし付られて足掛へ足へんとて
し庄ハの足土俵のきはへ寄て渡りければ土俵きはにて拾し
負たと挨拶をし合し時一足土俵を渡りしかは物のついて出る
せる悦へたまらしとおれはたかいのあらしと又土俵踏を出ハ大関へ

方近うちはをあけし中へ入とく一度の玄踏幡乃国の四ツ
いまり上方下まとし鹿花飯やられぬあとて旅の中あり
さ此乃よし行司年寄の段なとにいちにし座首を入
行司式守伊之助を以東のことくし山にあけ勝川を
合せしこしちる山下をまてあし判をなしきしかりて
下れ居れりて上の足へよりあし西きなりしを安曇
西の銀柳おしはゆんて勝東乃赤になし浪濱の二の下
き川とにへ中常のうへうはをかしに引たつくしの東の
浪花柳川なりしてする東に明石乃河内のおそろしも高く廻
あまりにそみやら成ハ見ならぬ石ちまて座の取西の合の濱
にて手投よたの取る川とりて花形川のたかいの白銭西乃

石巻山とて[illegible]て日比よりさき牛れのるとひろうとせう俗説
川をたしかに乃之保の湾なり巻り東の湾川須万の実を
を称し東は高の岩堵乃川を隔むる沙月本村庄屋前
のるを東乃加茂川荒田の首代うけうれとも所を
かしといふるなるとも飛鳥川うきしへるを城西
八雲山とのなまえ小のうるとつうかを見城内ら幾代
抱しるるを東を投しうを西の礼柳なるを
小く投し伝を江を西乃奥の海を神の浦を西の
言尾山城しきる東乃相の時廣国と比なにまみ
廣田川城ら[illegible]ちかを[illegible]を[illegible]
のて[illegible]のうをめ[illegible]を論しみ小うりあをうかけて地を

く牛を投出を文斜西の越の浪よそくきれを頁
なり和田の海を西の秋田川たしまを勝東乃和田勝を
用ケ実をかいるひろりして[illegible]中[illegible]武内秀家所[illegible]
沙田を琴の浦を西の[illegible]実を称をこ[illegible]れを[illegible]て
勝浦より矣を西を三浦海[illegible]おとし東の宮の川
国の嶽を[illegible]もう芸を山を西乃岑に[illegible]て投梅の尾
を西の荒沙[illegible]沢[illegible]東の甲斐の実をおしきう
つ沙田岩[illegible]をめ[illegible]合を虎渡りを西の象うもる
を称し東は岩の洞を波を浅一切温海嶽浅西乃
神姫山を東乃松岩うるはりひて秀の山を越乃
頁とあるを岩乃とし芸今おしりを匠[illegible]所波

かゝれとあまりくさしかゝん見れハむしつ
東の灘の吉波の音旅きこゆれハみるかと波せ
残しきりにて夏ぬ式平定女ハ語りてめし合せ東乃
波渡を渡りさけ残りひな皇しそおけし東の岩
が根巌当をわくて鳴しらなくこ走り上の石か
稲川を西の鳴瀬に乗けまみをしきり足猪か胸へ西の
芦源の貝を残しあて腰を入ゐて縁勝をしく割外なり
足残りけるをおし鳴く皇しきとし心る兵残て宿
ところ岩無山を西乃越の戸をちるは東れハ和田乃
埼とんなこ桿切る殺井川ハ又西の達の実立あふつきも
埼とのたつの現形せるおとし残そまし乃古之達ハ実ら

笠嵐のおまておとにきく葉はしけれハ治る今すく
あせ残つ浪りあつ見えせせん色なれと浪とし越るハおまか
しきこてちは萩そのくる残しる伊予の紐の殺井
が腰しよせ乃残らのりありつ残して残して住宿
ころりとそりやく出く見ゐのへてうつる残は住近番
まてそ越るつしせひを芝なり三段と縁せる浪田
本村庄を神こもとひ九段はまて見て宿さ波あて
まさまてて丈しつくおし色ぬりさや桜戸ハ源女か
とまらこてのひ谷路の音てこ浪きてたりと見へ佐海
こりはまて仁まよくに大凌源へ上し佐見る庄女
柳戸の名方へうち残さこけおむむ正とひの代蔵まてへうりと

賞しゝ扇にさうゝかなり紙せてうるゝ乃異なめり
詞を挑んかけ実盛の陣幕に雷電して無数
かみなりを記したるをあとに立合ひ陣幕を
なく雷てんりのとく白紙うけ乃とりつけとて
をしゝ長二度小太鼓押つけ合ひ無数の白色
星出たいまゝれ扇に立合ひたるこゝろなり
賭ける紙心ひの印なるなり人云今日実盛
の名を重ゝ弦陣幕ふあゝ志ゝ色のゝ
て逆風吉乃遠に乗乃白裏なり鍋りし唐衣
に幅の袴といふるを此師を白雲扇に
世ゝ傳へる紙持ゆりもゝ先四あるとゝ

見西太鼓の中央大なり中流なるを月たなり小野川
篠風四ゝ五ゝ四ゝ出御物見乃ゝ紙波一太鼓ゝ
たゝ五ゝ五ゝ今日御川流ゝ紙むゝ上中下
さめ紙色川なるゝ合ゝ
に四ゝさしゝ合ゝ
笑ゝ先四ゝ
乃下ゝ小野川篠ゝ
なゝて雲扇ゝ
ゝゝ雲ゝゝ志ゝ
に志ゝ
ふゝ

めし三度なち給ふと追風蛍扇をあけ
はなの宴にて忍ひして弓の弦さへ宮の先のはなみ
小将ハ後乃よしみとて勝負(?)せるなりと紀良たに
縁の城ちかへんみ舟出したりしは八幡の丈枝つへきなく
二年ハことゆかぬこゝちし なまて野田人の宿禰の歌連
給ひし所ハ帛山三志白川の所々の名所を施入せさせ給し
中へなりにも事多し宮をわし見して有はきこ
にやかん蛍風弓を給ひけうや御ひとりけに弓丹ゆり
只しおしおかしけ給ひて入ぬ弁の弦を給ひしこと
織田内府乃道にし國常樂寺にして宸をとど
以へる弦乃宴まで相撲乃弦ひしけ勝つる弦貴し帝

祝へる今宵今ゆかしおかんといゝあり

勝ふに今日弦の進撰弓
元乃弦なる例ぞ恵し

相撲ことく将白ワ序とよ弦の生と紙
君か代にあふ宮乃弦も名高も
恵乃露ほたへそふかし

後野肥前守義行いぬし以上紀る
詠し合ふへし相撲乃ことわりも
心ひとり川へれはいと事し

ちへ和歌も紀へしかなるものに祝さへ給ふぞ

の重てわさと年二度くらいはなとさかくて
いとうり奇法くれり

翠幔新開揺場　横綱意気最低揚
雙々分得英名遠　西々帯將寄骨香
錦綉禪迎千里秀　弓弦賞見一時光
拔山餘勇結休買　別有神列誓吉裝

弥丹文章の花咲く男廉の角れつるみしうさ筆に
書法くに風うもあり　もをし鄭乃廣
御恵ふかく新日ぞを見ん今年　酒のうこと

一ふさ此あり　なり

寛政四壬子年　初秋四寫寫

はるとさくらかくと

愚気最飛揚
將寄骨香
一一時光
古裝